まちづくりひろしま
被爆１００年(西暦2045年)の姿をめざして

第１６号(平成２７年３月１５日)
読者数：５１４名（募集中）
ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ：hirosima.idea.c@urban.jp
〒733-0002　広島市西区楠木町 1-9-7
発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二
配信元：広島アイデアコンペ実行委員会
ご提案・ご意見等は、こちらまで

□巻頭言

これからの市・県職員の要望される資質

広島諸事・地域再生研究所主宰
石丸紀興

今まで言いたかったことでもあるが、昨年発生した大規模土砂災害時における市・県職員の対応を見るにつけ、ますます確信ともいうべきことに至った結果での執筆である。

気づいて欲しいこと

昨年（2014 年）８月 20 日に安佐南区と安佐北区で大規模な土砂災害が発生した。その原因や対策の検証は別途なされるべきであるが、その災害後に多くのボランティアが訪れ、土砂の除却や運搬、清掃等の労力・協力を提供しようとしたことは報道されたのでよく知られている。そのボランティアを受け入れるためには地元との折衝や準備、さらには事後的な作業を含めて多大な業務が必要になったことは十分理解できるのである。それは通常の業務の枠を外れた時間や場所での特別業務であったことも理解できる。

しかし、ある時期にボランティアの受け入れ体勢の不備が多々見られ、巨大なボランティアの潜在能力を必ずしも有効に使い切れていなかった。これらのことは、災害発生から事態推移をつぶさにみていれば十分気づけるはずであったが、なぜか事態はすぐには好転しなかった。たまらず、市の職員に直接進言したりもしたが、ピンとこないようで何も反応が来なかった。面倒なことには関わりたくないというのであろう。この時機、事態を見渡し、「今必要な対応、対策は何か、そして全体をどう納めていくのか」と考えるスタッフが是非とも必要であった。ボランティア問題にとどまらず、市行政・県行政で散見される「なぜ出来ないの」といったことの存在とその原因・理由に気づくべきであろう。

建築分野での広島

広島は若手（今や壮年）建築家が活躍している都市として有名である。ある時期、作品が表彰されたり、雑誌を賑わしたり、話題にこと欠かなかった。現在も全国から注目されている建築家がいて、見学対象になる作品も広島には多い。

ところで、時々マスコミに登場する被爆建物保存問題には気づかれているであろうが、多くの方は出汐町に圧倒的な存在感をもっている外観レンガ、RC 造の旧陸軍被服支廠のこともご存知であろう。実はこの建物を、県外から訪問された建築家に見せると、その存在に驚くと共に、広島の建築関係者はなぜこのような建物を長年放置してきたのかと驚くことになる。本当に建築が好きな関係者が広島にいるのかというくらいの基本的な問題提起なのである。この建物は現在県が管理しているが、広島の建築文化のレベルが問われる事態に気づいていない。

旧陸軍被服支廠

資質を問う

市・県職員はもはや、記憶力や理解力だけでなく、また従順に上からの指示に従うというだけ

でなく、ある事態（異常であれ常態であれ）を総合的に理解して必要な対応・対策・政策に気づき、それを少しでも実現の方向に進める努力をするスタッフが必要なのである。公務員の退職時の挨拶の常套句「大過なくこの〇〇年間を過ごすことができました」というだけでは、広島の将来はお寒い。他都市で意欲的な政策が進められていること、また関係者が積極的な生き方をしている場合のあることを見聞する時、いつも広島の実態に胸が痛むのである。

ひろしまのまちづくりの動き

〇市が旧市民球場跡地整備イメージ発表！

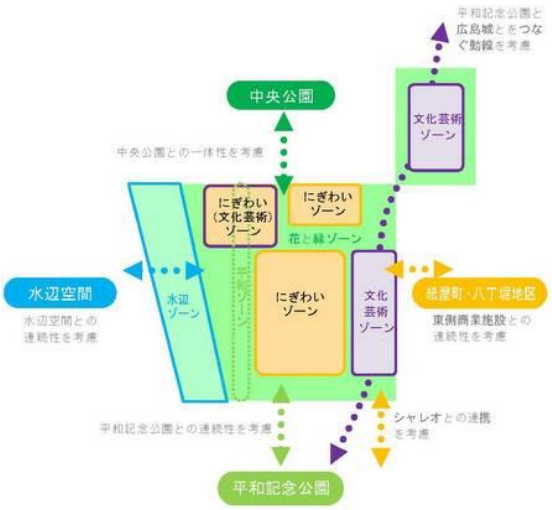
広島市は旧広島市民球場跡地に屋根付きイベント広場を中心とする整備案を正式に発表。一方、サッカースタジアム建設の検討協議会の報告書は候補地として球場跡地と広島みなと公園（南区）の２案を併記している。

サッカー場は県、市、商工会議所の職員による作業部会で７月頃までに候補地を一つに絞り、球場跡地が選ばれた場合は県知事と市長のトップ会談で決めるという。

市の整備案は２０１３年３月に示された活用方針に基づくもので、「緑地広場」、「文化芸術」、「水辺」にゾーニングされ、にぎわい創出のために屋根付きイベント広場を中心に野外ステージやこども広場等を配置しているのが特徴。

一部残るライトスタンドは撤去する予定だが、早くも反対運動が起きている。

旧市民球場跡地整備イメージ図



ゾーニング図（広島市の HP より）

市の発表の前に、当時サンフレッチェ広島社長の小谷野氏は４月の市長選に立候補を表明し、サッカースタジアムを球場跡地に誘致してまちづくりの核に据える意向だ。松井市長も立候補を表明し、その後、今回の整備案を発表した。

球場跡地はサッカー場か屋根付き広場かが市長選の争点の一つになりそうだ。

サッカー場は反対だが、市の案でいいかと問われれば、疑問符が付く。エリア内に収めることに汲々として周辺とのつながりや広がりに欠けている。市の担当者とコンサルで内部的に検討するのではなく、球場跡地の基本理念を問う公募型プロポーザル方式により設計者を選定してはどうか。多くの提案の中から周知の中で最も優秀な提案者を特定することにより、多くの市民が納得できると思う。

（編集委員　瀧口信二）

〇広島の復興の軌跡（第１１回）・被爆建物「旧日銀広島支店」

旧日本銀行広島支店は広島市の中心的な繁華街である紙屋町や八丁堀から至近のところ、広島電鉄の市内電車（広島駅⇄広島港）の袋町電停を降りた東側にあります。

日銀広島支店として１９３６年（昭和１１年）から１９９２年（平成４年）の間、中区基町に移転するまでの５６年間使用されました。

戦前の姿

旧日銀広島支店の前身、広島出張所は１９０５年（明治３８年）に水主（かこ）町に開設されましたが、業務拡大に伴い、この地に移転、建設されたもので、設計を担当したのは当時日

銀の技師長だった建築家、長野宇平治。長野は戦前に日本銀行本支店を１５件手掛けており、現存しているのは８件で、被爆建物の旧広島支店もその一つです。

建物は鉄骨鉄筋コンクリート構造、地上３階、地下１階。外観は渦巻き状の柱頭をのせた角柱などギリシャ建築・ローマ建築風の古典様式を取り入れており、広島における昭和初期を代表する建築物の一つです。

被爆の状況

川本俊雄氏撮影

１９４５年８月６日、広島支店は爆心地から３８０ｍという近距離にありましたが、堅牢な建物ゆえ被災に耐え、今日、現存する被爆建物の中では極めて良好な保存状態にあります。原爆投下時、中央部の吹き抜けガラス屋根は大破しましたが、建物自体は天井も落ちず、倒壊を免れました。１、２階は鎧戸を閉じており、地下金庫室とともに内部損傷も免れています。行員のほとんどは１、２階で勤務しており、被爆したものの、一命はとりとめました。しかし、３階は窓を開けていたため、間借りしていた大蔵省広島財務局の職員１６名の大半が死亡しました。

復興の歩み

建物の損壊が軽微であったため、その日から被災者の収容所となる一方、７日にかけて行内の後片付けを終え、８日には業務を再開。さらに被災して営業が不可能になった市内の金融機関のため、窓口を１１区分し仮営業所を開設、預金の引き出し、支払業務に応ずる場を提供しています。

実は私が中国放送の記者時代の１９８５年（昭和６０年）、被爆４０周年特別番組「瓦礫の中から～広島経済復興史～」を制作しました。壊滅状態になった広島が短時日で如何にして復活していったかを当時を知る１６人の方にインタビュー、被爆当時の映像と「今」を交え構成した番組です。その一つのコーナーが金融の混乱と市民の不安を未然に防ぐためいち早く業務を開始した銀行の果たした役割についてです。当時、芸備銀行（現在の広島銀行）塚本支店に勤務していて、開設された日銀の仮窓口で支払業務を行った松田勝さん（７６歳）へのインタビューを「窓口」の前で行いました。

「…９９％は引き出しの人ですよ。通帳も印鑑もないんですが、窓口の我々もいろんな支店から来ており、お客さんと顔見知りなもんですから、この人なら大丈夫じゃろうと、まあ、勘、勘ですよ。後になって調べたところ、思い違いはあっても、紛争のもとになったのは一件もありませんからね…。」

いち早く金融機関の営業再開ができたのは当時、芸備銀行の副頭取、伊藤豊さんが日銀の吉川支店長に再開の必要性を説き、支店長も全く同じ考えで、日銀の一階部分の提供と支払資金の融資を約束したことによってでした。

松田さんは伊藤副頭取のことを「…こういう時期に銀行が不安を与えてはいけないと、決心といいますか、強調されたわけですよね。これが立ち上がりが早かった一番大きい原因じゃないかと思うんですけどね。お客さんの信頼に応えるんが金融機関の使命だぞ、いうふうなですね…」と私のインタビューに語っています。なお、他の同様の「証言」が広島新史～経済編～の２２ページ～２５ページにかけてあります。

基町へ移転

現在の旧日銀広島支店

日本銀行は１９９２年に広島支店を中区基町の広島市民病院東側に新築移転し、旧支店については１９９６年、売却方針を明らかにしました。これを受けて広島市は「跡地利用構想検討委員会」を設け、日銀との交渉を始めました。広島市は無償譲与を要望、日銀は原則時価売却を主張して譲りませんでしたが、最終的には日銀が「文化財指定」を条件に広島市の提案を受け入れました。２０００年７月には広島市が市の重要文化財に指定。平和記念都市建設法に基づき両者が使用

貸借契約（無償貸与）を結びました。無償貸与期間中は市が維持管理費を全額負担、固定資産税などの税を免除することとし、日銀は国の重要文化財の指定がされた場合は「無償贈与」することが正式に決まりました。

芸術・文化活動の発表の場

２００１年、広島市が「民間団体の芸術・文化活動の発表の場」として暫定活用を始めて以来１４年が経ちます。絵画・写真展、パフォーマンス、神楽などが不定期に催されています。一階に関していえば受付カウンターで仕切られていることや音響面で問題があり、「芸術・文化活動発表の場」として決して「使い勝手の良い場」ではありません。しかし、先述したように被爆建物としては極めて良好な保存状態にあります。建物内部も被爆２日後に預金の支払い窓口になった受付カウンター、被爆時にガラス片で傷が付いた支店長室の壁、地下の金庫室など等、当時を偲ばせる状態で保存されています。

イベント空間として活用

日銀旧支店が有効活用されている例として近隣では岡山と松江にあります。旧岡山支店は「ルネスホール」の名で多目的ホールとして、旧松江支店は製造・販売一体型の工房、レストラン、喫茶店、各種イベントを行う「カラコロ工房」として観光客も多く訪れます。

２月１２日の中国新聞オピニオン欄で論説委員の東海右左衛門直柄氏は「被爆建物の残された数は極めて少ない。今、必要なのは、地域ぐるみで被爆建物の価値と活用策をあらためて議論することではないか」と問題提起しています。被爆７０周年の今年、被爆建物として象徴的な存在の一つでもある旧日銀広島支店ついて方向性を出す時期ではないでしょうか？

＊（主な参考文献及び掲載写真）日銀広島支店の HP 等　　（編集委員　三宅恭次）

□*ほっとコーナー*

『植物と学生たち』

ガーデニング工房花の散歩道・園芸アーティスト　はしもとまちこ

広島市内の少し郊外の短期大学で非常勤の講師をしています。２０歳前後の女子学生を対象として生活に根差した環境についての授業です。

循環型社会が大切、地球が温暖化になっていくのはどうして、対策は？京都議定書の力は・・ということですが、私の得意とする緑環境についての内容がメインなのです。

大学のすぐ裏手には＜あかねの森＞とネーミングしたチョットした林があり、孟宗竹が生い茂っています。ここに小さな花壇作りをしました。スコップも軍手も土も珍しい学生は藪蚊に刺され悲鳴を上げます。「でも、この授業がなかったら大学に森があることさえ知らずに卒業していたかも」とレポートに書いて私をほろりとさせます。

自然素材を使って蔓でクリスマスリース作り、うるち米のワラではオリジナルしめ縄作りもします。紙の再利用の大切さでは、英字新聞紙でエコバックを作ると、「ゴミだと思っていた新聞紙がこんなに可愛いバックになって、他の紙も大切にしよう」と言います。

５つのＲも勉強しました。もったいないが身についてきて最後のレポートには「食事の時のごちそうさまには有難うの意味も含まれていると判りました。」と書きました。

未来に向かってはばたいて欲しい学生たちです。

舟入病院前の花壇

学生達と作った魔女のホウキ

○「時代を語り建築を語る会（第８回）」報告　語り人：石丸紀興氏
～広島大規模土砂災害から～広島の各種計画を検証する～

略歴：1940 年岡山県生まれ、1966 年東大大学院卒、広大建築学科助手、1996 年同大教授、2003 年 広島国際大建築学科教授、2011 年広島諸事・地域再生研究所代表

今回は、長年広島の都市計画に関わってきた石丸紀興氏が昨年８月に発災した大規模土砂災害から見えてきた問題点等について反省的な報告を行い、参加者と共に改善点等を深めていった。

主催：時代を語り建築を語る実行委員会（代表：石丸紀興）

日時：2015 年 2 月 28 日、場所：まちづくり市民交流プラザ

☆　**総合計画の必要性**

・８月の土砂災害では、リアルタイムでテレビニュースを見ていたが、なかなか事態の全体像把握に至らないことに気づきイライラしていた。災害発生の全体像、その原因や担うべき各分野の責任の全体像を明確にしておかねば、今後 10 年、20 年と時間が経過したとき、この災害体験の教訓がうやむやになるのではないか。

・防災計画や都市整備などを総合的に考える「総合化」について本気で取り組むべきである。

☆　**大広島計画が基点**

・昭和初期に広島市が周辺町村と合併を進める基になった「大広島計画」には、人口増を単純に歓迎するというのでなく、「広島の保護が第一」として規模を大きくするだけでなく、安全を第一にすべきことが示されている。旧藩時代から山林保護には力が入れられてきたことを強調している。

・ところが一転して昭和中期（33 年）の「大広島計画」では、10 年間で 55000 戸建設、用地所用面積約 760ha を想定し、平地部よりも山地開発を優先する考え方を提示した。この段階では防災的な観点が十分に示されなかった。

☆　**第３次総合計画に「防災」ほとんどなし**

・荒木市長時代、平成元年策定の第３次総合計画では、山田市長時代の第 1 次やその後の第 2 次総合計画で示された規制的な政策が転換され、防災についてはほとんど触れられていない。西風新都やアストラムラインの計画をはじめ、規制緩和による開発を受け入れる姿勢を示している。

・昭和 42 年の呉地域災害が地形的、地質的にも広島に似ており、同じような気象条件になれば同じような被害が出ることは指摘しているが、具体的対策は示されていない。

☆　**急速に進んだ市街化**

・総合計画策定以前、私自身が携わった GYS 開発マスタープラン（昭和 43 年の祇園町・安古市町・佐東町地域開発基本計画）では、今回のような山の上からの土砂崩れ対策についての意識が弱かった。当時、急激に進んだ市街化を市街化調整区域で食い止めることは考えたが、防災的な観点での規制手法ではなかった。宅地開発について規制をもう少し厳しく考えるべきであった。

☆　**住民参加の手法導入**

・昭和 46、47 年に日本都市計画学会中国四国支部が広島市から委託された「広島市周辺部整備基本計画」で住民参加の手法を取り入れた。

・平成 19、20 年度において日本都市計画学会同支部で取り組まれた市民ワークショップによる地区別まちづくり構想策定は、その手法自体は画期的で評価すべきであるが、テーブルマスターとしての専門家が、本来の専門家としての役割を発揮しておらず、防災的な視点が弱い計画策定となったことを反省しなければならない。ワークショップ手法を基本的に改善すべきである。

＜コメント＞

住民の合意や専門家の意見が行政に反映されなければならないが、実際には「審議会」のような形で、行政当局の意向に沿ったものになっているのが実態だろう。住民の声を大切にしてこられた石丸氏の取り組みや姿勢、広島市の防災思想の変遷がよくわかった。

（ジャーナリスト　吉田光宏）

○ひろしま市民ひろばの提案！

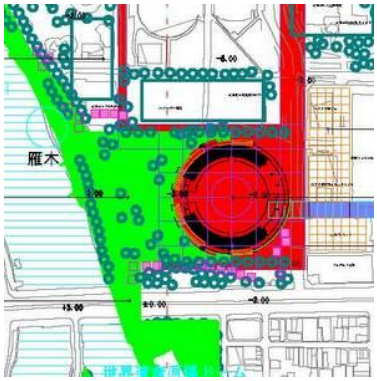
２０１１年に広島市中央公園アイデアコンペを終え、地元の建築家として何か提案しなければという思いから、日本建築家協会中国支部広島地域会のまちづくり委員会で検討し、ひろしまのグランドデザイン「ひろしま市民ひろば」をまとめた。２０１３年３月に広島市に報告し、各種イベントにおける展示・発表等で多くの意見をいただき、現在見直し中である。さらに議論の場を広げるため、具体の提案内容をシリーズで紹介していきたい。

その１．バスセンターの整備

広島市民のみならず他県からの高速バスや広島空港からのリムジンバスの発着点として毎日沢山の人に利用される広島バスセンターは、広島市中心部の紙屋町地区周辺に分散していたバス停を一箇所に整理・統合して、昭和 32 年 7 月 29 日に日本初のバスターミナルとして開業されました。当時の建物は２階建ての独立した建物でした。

昭和４７年頃のバスセンター

昭和 49 年 10 月にそごう広島店とアクア、広島センター街と合築した建物に建て替えられ、現在の３階の広島バスセンターの形が登場しました。当時、郊外バスと中心地デパートを直結する画期的な出来事でした。ちなみにそごう広島店とつながるアクア、広島センター街は広島バスセンターが運営するショッピング施設です。その後、2001 年 4 月に、地下商店街通りシャレオが県・市・民間企業の出資による第三セクターにより開業し、現在の中心商業地を形成しています。私達の玄関とも言える広島バスセンターは戦後の復興の象徴として広島県民の心の支えとなっており、今や 1 日平均の乗降人数が 40, 000 人、バス発着台数 1700 台にも昇ります。



市民ひろば（赤部分）の
地下円形部分がバスセンター

平成 21 年 3 月の広島市民球場の移転以来、旧球場跡地の活用方策の検討が続けられていますが、いずれも跡地に限った検討であり、この千載一遇のチャンスに広島中央公園一帯のグランドデザインに至る計画的、総合的、戦略的な思考が求められます。

そこで、その基本となる交通機関を考え、新交通システム、市内電車、そして地域の駐車場と機能的に連携し、スムーズに出入りできるように中心市街地の心臓ともいえるバスセンターの位置、機能を提案します。

市民ひろばのイメージ図

① 現バスセンターも築後４０年が経ち、建替え時期がいずれ来ます。球場跡地地下をバスセンターとして整備し、移転が決まるまでは観光バスや一般車の駐車場として利用します。
② 鯉城通り交差点から南下し、駐車場位置から地下に入ります。バスターミナルレベルは、メルパルク１階よりマイナス４㍍、商工会議所西側の護岸土手からは、マイナス７㍍程度とします。幅員は 16 メートル、最大勾配は 6%程度とします。
③ 現在のバース数（乗車 11、降車 10）を確保し、観光バス発着場も併せ整備します。そのため、直径 100 ㍍程度の円形バスバースとします。
④ 地上レベルは、市民ひろばとします。そして、**次回に提案するＮＴＴ再開発**（既存のバスセンター及びＮＴＴに公共参加型）により、市民ひろばから元安川に向けてなだらかな都市空間を形成します。

（JIA 広島地域会まちづくり委員会委員長　前岡智之）

○こまちなみシリーズ⑥

金沢市は「こまちなみ保存条例」を制定し、「まちの歴史を色濃く残した、ちょっとした良い町並み」を「こまちなみ」として守り、育て、その雰囲気を生かした風格あるまちづくりを進めている。そこで、これに倣って、広島における残しておきたい「こまちなみ」を探訪し、シリーズで紹介する。

廿日市市・宮島の古い町並み（その1） ～厳島神社の門前町：東町～

廿日市、地御前と縁の深い**宮島**は、室町期以降、厳島神社の門前（対岸）の相互依存・補完地域と云う意味で「**宮・廿日市**」と称呼された。此度の**宮島・東町**は、定期船が着くターミナルから、五重塔・千畳閣のある塔之岡の手前迄の範囲の商家町である。最近の私共の調査、その読取り結果を含めて、宮島・東町の町並みの形成・ほかの特徴を、以下に示したい。

室町期末の頃、当時、有之浦に面した谷部の**現：魚之棚**等の扇状地や砂浜で最初の整備がなされ、谷から海に向かう水路・路に沿う**小路中心の家並み**、後に、山手の**寺社門前の小集落**を形成した。東町の曙である。

江戸初・中期以降、**現：町家通り**の山側の**後町通り**付近に**路・家並み**を形成した。このことと係わり、更に、有之浦の海岸低地で第２次の埋立・造成がなされ、海岸線に平行・弓形の**現：町家通り**、そして、海岸に向かう**小路**、それらの**両側で敷地割・家並み**を形成した。敷地間口は約３間、その奥行は通りに沿う敷地の場合の方が、小路に沿う場合より、長いものであった。次の期に設置される**誓真釣井**（共同井戸）は、ここ迄の地理的範囲に設けられたのである。

江戸中期以降の第３次の埋立・造成で、**現：表参道**と呼ぶ**通り中心の敷地割・家並み**を形成した。

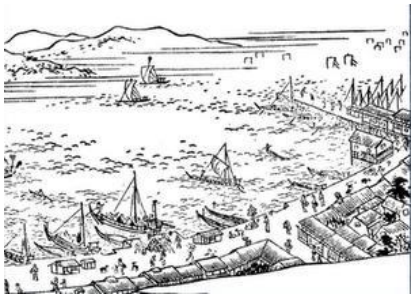
結果、**通りや小路に囲われた街区形成**がなされた。東町の基本骨格が形づくられたのである。これらの街区の中に、鬼遊（おにごっこ）・鬼隠（かくれんぼ）等の路地的小路や井戸・祠・裏路地等々が形成された。**裏路地**は、私共の調査で見出されたもので仮称であるが、造成時の海岸側の曖昧な場、つまり結果として、２つの通りの間（中程）に設けられ、近隣の井戸・交流利用、防災避難路等に供されたものと推測できる。生活に息づく一つの場の形成と云える。

昭和期の第４次の埋立・造成で、**現：海岸通り（貴賓道路）**ができ、以上と同様に、**家並みが整えられた**。

総じて、主に江戸期からの数度の埋立・造成で、**通り中心の家並み形成**を、**海に向けて、順次《列状》**に繰返し、その結果、**厳島神社の門前町としての商家町：東町の町並みが形成された**ものと云える。なお、江戸期以降、経済・海上交通の要衝として、築港・商工業振興もなされたのである。

さて、**敷地割**は短冊型で当初と変わらず、殊に、間口は、２枚の古絵図と現在の地図に係る私共の考察から、この事を左証している。**水路**は主に道路下に敷設され、**町内会範囲**は通りを挟んで組まれ、共々に造成の影響が認められる。

産業に係り、厳島神社への参詣者に対する商い、遊郭等の存在がある。神社への参詣者は、**山辺の古径**や**通り**から町家（店・宿・など）を用いたものと推測できる。



東町・有之浦
（芸州厳島図会：部分）

東町の通り・小路の構成

五重塔からみた東町の町並み

「町家通り」の家並み・五重塔

一方、**町家の特徴**は、平屋建てを基本とする**切妻造平入り**であり、旧来は板葺きとする三寸勾配の**緩勾配屋根**である。約 2.5 間の間口、1 列 3 室型（ミセ・オウエ・ザシキ）、3 室の中央の《オウエ》は吹抜けで、そこに「神棚」が祀られている場合が多い。（なお、《オウエ》の形を取らない形式も存在している。）更に、内部に坪庭、半間幅の《通り土間》を持つ町家が多い。そして、**隣家と密接**し、**通りに沿った家並み**がつくられたのである。この各町家の**《通り土間》**は、近隣の親しい方の、通り抜けの路としての意味もあり、私共の調査で、実に多くの事例（約 40 例）が、古い地域範囲内で見出されている。外部からは、見え難い《町の仕組み：生活路のネットワーク》があった訳である。

結局、以上の全体から、**歴史情緒豊かな落着いた佇まいの町並み**が形成されたのである。

現状の課題としては、居住者の高齢化・町家の老朽化・空家の増加・等がある。一方、観光客の増加・島外若者のカフェ他の出店・若い女性の来島の増加・大学の教育研究の基地化・町家通りの行燈設置・表参道に対して町家通りへの賑わいの多少の増加・町家や町並み保全への住民の動き・伝統的町家保存や伝建地区指定等への行政の動き・観光に係る検討の具体的な展開・等々もある。

次回は、西町の町並み、東・西の両町の町形成の特徴比較、町家保全・伝建地区に係る最近の具体的な動き、等々を扱う予定である。

（広島工業大学名誉教授　森保洋之）

○*座談会：「ひろしまのまちづくり」*

「まちづくりひろしま」も発刊３年目を迎え、これまで「人物登場」コーナーで紹介した方々に３月３日、集まっていただき、ひろしまのまちづくりについて語ってもらった。

・出席者：若狭利康氏、井上英之氏、松波龍一氏、石丸良道氏、（編集委員）前岡智之

・会　場：広島市まちづくり市民交流プラザ・会議室 B

予定した時間をはるかに超える熱のこもった時間となった。以下は、その概要のキーワードである。**（詳細は、次号で掲載）**

○祭り

祭りは、まちづくりと切っても切れない関係にある。日常からはみ出て、弾ける時間、空間があることが町の活性化につながる。フラワーフェスティバルは魅力不足。大亥の子推進中、いろいろな祭りを用意している。

○バカ

まちづくりは、バカが要る。1000 人のバカがまちを変えることができる。祭りってバカバカしい、でもこれが魅力。ひろしまにはこのネタがみえてこない。そこが課題。

「無いという過去」を持つひろしまがこれからどうしていく。未来にネタとなるものは？

○球場跡地の利用

被爆により、世界からの支援を受けて得た市民資産だから「誰でも自由に使える」がコンセプト。ここから未来に向けて平和への神話を創り上げていくところ。今の選択や公開されたビジョンは、不十分だ。あの場所への愛着が聞こえてこない。誰がどう決めていく？

少なくとも、周辺地域も含めたグランドデザインが要るし、この検討から入らなくてはいけない。ただ、紙屋町の地盤沈下対策としてゆっくりしてはいられない。

○まちづくりフェスタ

ひろしまでのまちづくりフェスタを妄想しているが、目玉は何？キャッチコピーや絵柄など具体にプロジェクトデザインが必要。そこから始めよう。デザインを世界に向けて発信したらエネルギーが得られる。

○いくつかのアイディア・・・私の平和宣言コンクールとイグノーベル賞

時間も残り少なくなり、今後もこういった時間を若い人たちも交えて継続的に行っていこうということとなった。折しも、ひな祭りの夕べは小雨。一同は、街々に解散した。

編集委員　前岡智之

○読者からの投稿

かき船移転に思う

無職　微意　徹（広島市民）

原爆ドームの南方約２００ｍの元安川に船上でかき料理等を提供するかき船「かなわ」が移転しようとしている。平和大橋の下流にある現在地は治水上の問題があるため、国から水がほとんど流れない死水域への移転を求められた。市の手続きを経て昨年１２月に移転先の許可が下りたが、市民団体等からドームに近くふさわしくないと異論が出る。

市は広島の食文化の発信は平和に寄与するし、移転先の元安橋脇には既に飲食店や船の発着場があり、なんら問題ないという。

市民団体の要請を受けてユネスコの諮問機関であるイコモス（国際記念物遺跡会議）が調査に乗り出す。移転先はドームの景観を守るためのバッファーゾーン内にあり、世界遺産の精神的価値を下げる可能性があるとして再考を求める。

現在、市民団体は「カキ船問題を考える会」を結成し、移転撤回を求める街頭活動と署名活動をしている。以上がこれまでの経過である。

市長をはじめ市の職員は被爆の惨状を分かっているのであろうか？水を求めて元安川に飛び込み、多くの被爆者がどんな凄惨な状態で亡くなられたのか。なぜあそこで灯篭流しをするのか。河岸の飲食店と同レベルに考えているとは情けない。しかも「かなわ」は一民間の営利企業ではないか。なぜ公の川の空間を利用させているのかさえ理解できない。既得権があってやむを得ないとすれば、営利企業としてもっと妥当な場所を指定すべきである。例えば、これから整備する予定の猿猴橋付近なら、広島駅にも近いし、猿猴橋復元や周辺の環境整備とも相まって食文化と賑わいに寄与することが期待できると思う。

□編集後記

あちらこちらで被爆７０年の文字が溢れてきている。ひろしまは、無の時間・空間をもっている極めて稀な都市といえるが、草木も生えないとは、いまや死語となった。日本中のどこにでもある都市と同じ有様となった。そこでは、被爆を体験した人も、被爆を聞き学び継承する人も、それ以降の人も集まり住み、日常の営みが繰り返される。「時間の流れと一人ひとりの生き方と都市のとてつもなく大きなひろがりの中にこのメルマガがある。」と考えるとこのメルマガがとてもありがたく、温かいものと思えてくるのは、わたしだけであろうか？

（編集委員　前岡智之）

＊メルマガを読まれての感想や質問及びひろしまのまちづくりについて皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください！

（投稿は５００字程度以内でお願いします）

編集委員

石丸紀興　広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視　心豊かな家庭環境をつくる広島２１理事
瀧口信二　広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷　章　ガリバープロダクツ代表
前岡智之　中国セントラルコンサルタント代表
三宅恭次　元中国放送役員